

IV章 外国語（英語）活動の取り組み

平成23年度より、小学校において外国語活動が完全実施される。その外国語活動の目標は「コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。ここで言うコミュニケーション能力の素地とは、外国語を通じて「言語や文化について体験的に理解を深めること」、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること」の3点をさしている。直山木綿子氏（文部科学省初等中等教育局教科調査官）らは、これら3点について「外国語のコミュニケーション活動を通して」なされるものであると述べている*1。

本校では、本年度、外国語活動における「思考力」を措定した。「思考力」育成を図ることでコミュニケーション活動の質を高め、「コミュニケーション能力の素地を養う」という外国語活動の目標に迫ろうと考えたのである。本章では、本年度の研究の流れに沿い、「思考力」措定の背景から「思考力」育成を図る実践までを提案し、外国語活動の研究を振り返る。

なお、本校外国語活動においては英語を選択して実践に当たるため、以下「外国語活動」を「英語活動」と表記する。

1 英語活動における「思考力」について

（1）育成したい「思考力」

非言語的な要素を用いたり、文脈から意味を推測したりしながらコミュニケーションを図る力

（2）「思考力」措定の背景

① なぜ、英語活動で「思考力」か

「コミュニケーション」は人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達であると定義することができる*2。パターン・プラクティス（表現習得のために繰り返し行う口頭練習）やダイアログ（対話）の暗唱などを通して言語を習得することで、コミュニケーションに有効に働くことはあるが、それらの活動自体をコミュニケーションとは呼びがたい。「相手のことを知りたい」「自分のことを伝えたい」という意識が乏しく、知覚・感情・思考の伝達の要素をもたないからである。同様に、英語の歌を歌ったり、単に楽しむだけのゲームをしたりする活動も、雰囲気づくりや語彙の習熟等の効果は認められるが、それ自体にコミュニケーションの要素は少ない。コミュニケーションとは、定型的な言葉のやり取りではなく、これから何が起こるか分からない、何が聞こえてくるか分からない状況の中で行われるものである。

*1 安彦忠彦監修，大城賢・直山木綿子編著『小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編』2008，教育出版，18-21頁

*2 上掲書，36頁

ところが、小学校段階の子どもたちは、コミュニケーションを図るための十分な英語の語彙をもち合わせておらず、分からない言葉と出合うことも多い。だからといって、言語の習得のみに頼って対応するのは、英語活動がそれを目標とはしていないことから考えても適切ではない。

このように考えた時に、コミュニケーション活動を促すために必要な力が見えてくる。それは、言語面での不十分さを補いながら、自分の思いを伝えたり、相手のことを分かろうとしたりする力である。これまで、語彙をもち合わせていなかったり、相手の言うことをよく聞き取れなかったりすると、コミュニケーション活動がうまく進められなくなってしまふという課題がよく見られた。私たちは、それを解決するために働く力として、英語活動における「思考力」に着眼したのである。

② コミュニケーション活動を促す「思考力」とは

それでは、どのような「思考力」を育成することで、コミュニケーション活動が促されるのだろうか。

青木昭六氏（前愛知学院大学教授）は、日本の学習指導要領におけるコミュニケーションの考え方はカナル（Stephen M. Canale）の考え方が基盤になっていると述べている。よって、ここでは、カナルの論を手がかりに、コミュニケーション活動において求められる「思考力」を明らかにしていきたい。

カナルによると、コミュニケーション能力とは、①文法能力（文や文章を作り出す能力）、②社会言語学的能力（発話の適切さを判断できる能力）、③談話能力（文章の構成にかかわる能力）、④方略的能力（語彙力などの不足を補ってコミュニケーションを続けていく能力）であるとしている。

その中で、小学校段階の英語活動として育成し、活用させるのは方略的能力であると言えるだろう。直山氏らもその著書の中で次のように述べている。

さて、小学校で養成されるコミュニケーション能力について考えてみたいと思います。初めて外国語に触れる児童は外国語の文法能力や、社会言語学的能力、さらに談話能力などは皆無に近いでしょう。コミュニケーション能力としてもっているのは方略的能力のみです。そこで小学校の外国語活動においては、この方略的能力を最大限に活用しながらコミュニケーションを楽しむということに重点が置かれます。従来の英語教育においては、語彙や文法がわからないとコミュニケーションは停止してしまう傾向がありました。これは、学習の初期の段階でコミュニケーション方略を使ってコミュニケーションをするという体験が不足していたことが一つの原因だと考えられます。…（中略）…小学校の外国語活動では、方略的能力を最大限に使いながらコミュニケーションを行い、中学校に進学し、学習段階が上がるにつれて文法能力や社会言語学的能力、談話能力などを次第次第に身に付けていけばよいのではないのでしょうか。

（安彦忠彦監修、大城賢・直山木綿子編著『小学校学習指導要領の解説と展開 外国語活動編』教育出版，2008，36頁）

小学校学習指導要領解説外国語活動編（以下「指導要領解説」）においても、「ジェスチャーや表情」などの言葉によらない手段がコミュニケーションを図るための重要な要素であるとしている。その他、イラスト、写真、実物、地図、表や図形、会話における声色、声の強弱・遅速などもここに含まれる。実際のコミュニケーションにおいて、これらの非言語的要素をどのように生かせばよいか考えることで、言語の不十分さを補うことができるであろう。そこで、これらの「非言語的な要素を用いてコミュニケーションを図る力」

を「思考力」の1つとする。

一方、指導要領解説では、「言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること」も指導内容として求めている。ただし、それは、多くの表現を覚えたり、細かい文法事項を理解したりすることではないとしている。むしろ、会話表現を正確に理解して話したり聞き取ったりできなくても、分からない単語や表現の意味を推測しながらコミュニケーション活動を進めていくことが大切なのである。

それでは、そのようなコミュニケーション活動においては、どのような「思考力」が求められるのだろうか。それは、例えば“Here you are.” “Thank you.” という会話の後、“You’re welcome.” という表現を知らなくとも、およそ「どういたしまして」と言っているのだろうと推測する力である。この「文脈から意味を推測してコミュニケーションを図る力」をもう1つの「思考力」とする。

以上、2点を踏まえ、コミュニケーション活動を促す「思考力」を「非言語的な要素を用いたり、文脈から意味を推測したりしながらコミュニケーションを図る力」と指定したのである。

2 「思考力」育成に向けた本年度の重点

(1) 学習問題の設定

学習問題を設定する意義として、次の2点を挙げる。

- ① 「思考力」を働かせる必然性をもった学習につながる。
- ② 切実な問いをもつことにより主体的なコミュニケーション活動につながる。

まず①について説明する。ややもすると英語活動は、単語や話型を覚えることに目が向きがちである。しかし、それでは、子どもの「思考力」が働く場とはならない。「思考力」は、問題解決の過程で働くものだからである。子どもが課題や問いをもち、その解決に向けて「思考力」の働く学習を構築する必要がある。学習問題の設定により、「単語や話型を覚えること」から「分からない言葉があった時に、どうすればよいのかを考えること」へと学びの意識の転換を図りたい。

次に②について説明する。言語の習得に重きを置いた学習では、教師が伝える側となり、子どもが受け取る側となりやすい。しかし、そこから主体的なコミュニケーション活動にはつながらないだろう。教科の学習と同様、問いやその解決の過程を大切にする学習を英語活動においても構築していきたい。コミュニケーション活動を進めていく上での課題を捉え、その解決に向かって「思考力」を働かせることで、主体的なコミュニケーション活動につながると考えた。

しかし、ただ単に学習問題を設定すればよいということではない。学習問題につながる導入を工夫することも重要である。学習問題が子どもにとって切実な問いとなるよう、授業の導入を工夫することに留意しておく必要がある。また、その学習問題が、ねらう「思

考力」育成につながるものかどうかの吟味も欠かすことはできない。これらは、教科指導（学習）の際の捉えと同一である。

（２）目的意識をもったアクティビティの設定

（１）で述べた「学習問題の設定」とも関連させながら、「何とかして友達の言うことを理解したい」「何とかして自分の思いを伝えたい」という状況をアクティビティの中に組み込む。そのようなアクティビティを通して、子どもたちはコミュニケーションを図ることの大切さを体得していこう。

そこで私たちは、英語活動における「思考力」育成のために、どのようなアクティビティが適切なのかを考えてみた。そして実践を通しながら、目的意識をもったアクティビティを設定するとコミュニケーション活動が促されることを見出した。さらに細かく実践を分析していくと「話題意識」「相手意識」「場意識」の３つが、アクティビティの目的意識に働いていた。「話題意識」とは、何について伝え合うのかということ、「相手意識」とは、だれと伝え合うのかということ、「場意識」とは、どのような状況で伝え合うのかということである。これらの視点から目的意識をもったアクティビティを考えていくことで、実の場に近いコミュニケーション場面が設定される。それが「相手のことを分かりたい」「自分のことを伝えたい」という思いを誘発し、「思考力」を働かせることにつながっていくのではないかと考えた。

3 実践事例とその成果

（１）学習問題の設定

○ 第6学年「できることって何？」実践

自分の得意なことについて、友達と尋ね合うアクティビティを設定した。

その導入においてHRTとJTEの会話場面を子どもたちに示した。ここでは、JTEの“What can you do?”という質問に対し、HRTが“I can ～.”と答えるのだが、意図的に「～」の部分で不明瞭に発音した。JTEが何度か聞き返してもコミュニケーションが成立しない様子を見た子どもたちは、「伝えやすい方法を考えよう」という学習問題をもったのである。

子どもたちは、この問題を解決するために、「～」部分を強調したり、伝えた内容に合うジェスチャーを工夫したりしながら、コミュニケーションを図ろうとした。すなわち、学習問題の設定により、「思考力」が働く学習への方向付けがなされたのである。

さらに、この授業を通し、強調すべき言葉やジェスチャーの果たす役割に気付いた子どもたちは、他の話型においてもこの「思考力」を働かせようとした。このことは、自分の思いを伝えるために重要な言葉は何かを考えることでもある。会話において、すべての言葉が聞き取れなくともコミュニケーションを成立させるために、このような「思



【HRTとJTEによる会話場面の提示】